

中学校における組織的対応の必要性

— K 君に対するコミュニティ・アプローチの事例から —

三島 一郎 (大東文化大学文学部)

The Need for Systematic Response in Junior High Schools

— From the Case of the Community Approach to Student K —

Ichiro MISHIMA

【問題の所在】

発達障害の生徒の世界を周囲が理解することは、なかなか難しい。他方で、環境が彼ら・彼女らを脅かすことなく、柔軟に対応することによって、彼ら・彼女らが生きやすくなるのも事実である。環境が敵対的ではなく、彼らに配慮し、彼らを受け入れることによって、彼らは、息つくことが出来るのである。

ここで取り上げるのは、環境から脅かされ、なかなかクラスの中で居場所を見つけられず、逆に自己防衛からナイフを度々持ちだし、周りからうんざりされていた生徒が、他校の生徒から脅される事件を契機に、学年教員の組織的な対応から、問題が早期に解消され、同時に、当該生徒には日頃から組織的な対応が必要なことを、学年教員皆が共通に理解することが出来た事例である。

これがかなう以前は、当該生徒への対応は、担任が専ら行うのみであったし、その形態は、説諭が中心であった。周囲と当該生徒がトラブルになったとしても、当該生徒が言動に気をつけるように指導されることが中心であった。つまり、彼が変わることが多く求められていた。担任は母親に対しても、本人がナイフを持ってきたりするから受け入れられない。家庭でちゃんと指導して欲しいと、家庭での指導を第一に求めていた。ただし、学級では、担任はクラスの生徒に対し、彼を含めたクラスのあり方を考えてほしいこと、彼を孤立させてはいけないことを度々訴えており、彼の受け入れのために学級で出来ることを怠っていたわけでは全くない。

筆者は、当該校 (J 中学校) に、学校臨床心理士 (スクールカウンセラー: 以下、SC と略す) として、週に一日、8 時間、年間 35 週、勤務していた。

また、この論文では、ケースの展開について、当時の記録にあえてあまり手を加えない形で掲載した。その方が臨場感を持って伝えられると考えたからである。

【ケースの展開】

X年11月7日(金) 10:20 - 10:40 (20分間)

● K君との出会い

養護教諭より保健室へSCに出向いて欲しい旨、要請がある。生徒が一人、授業を抜け出して、廊下で泣いていたとのこと。生徒は保健室にいるが、来てくれれば会ってもいいとのことなので、SCに保健室に来てもらえないかとのこと。保健室へ出向く。そこで待っていた生徒がK君であり、これがSCとK君との初めての出会いである。

K君「それで何、何なの」(以下、「」内:SC以外の人の発言、<>内:SCの発言・[]内:SCの思い)と、突然のSCの登場に驚いている様子である。

<僕の方から何ということはないけど、養護教諭から話を聞いて、会ってもいいということだったので…>と、こちらも戸惑いながら伝えた。

K君は話始めるきっかけがつかめない様子。養護教諭が、「鉄道の話をして…」と、K君に助け舟を出す。K君はしばらく時刻表を広げながら、鉄道の話をする。それはK君の好きな世界の話で、安心して話を展開している。

K君は美術の時間の話もした。「とても気持ちよく絵を描いていたのに、じゃまされて」と言う。<何があったの?>と問うと、「腕をねじ上げられて。その前にひどく気分が動転してしまって。自分でも分からないくらい動転してしまって。こうなると気分が落ち込む。3時間目受けたくない」と話した。

● 発達の側面と思春期の課題

養護教諭の話だと、K君は、コミュニケーションの取り方が難しく、皆からバカにされ、実際、「バカ」という言葉も飛び交っている様子のものである。知的には高い。K君がSCに話をしたいことがあれば、時々、話を聴くようにする[器質的問題はないか。学習障害(LD)なのか。環境との相互作用もあるし、思春期ということを考え合わせると、さほど難しく固定的に考えることもない。ともかく、安心した関係を作ることから始めたい]。

養護教諭から担任にも話がいく。担任とも話をし、協力してK君の課題に対応していくことにする。出勤日の金曜日に担任より話を聴き、必要に応じて、K君にも会う形に。とりあえず、K君の必要に応じて会っていくことにする。

X年11月14日(金)

● K君をめぐる担任との話し合い(見立てと処方)

SCは、担任と、K君への対応について話し合いをした。担任によれば、問題として、K君は、女子との関係で、不用意に性的な言動がこぼれ落ちてしまう、そして、それを面白がっている男子の中で、K君が孤立し、追い詰められている。

同時に、K君のコミュニケーションが一方的である。それに付き合わされる周りが、うんざりしてしまう。周囲に脅かされ、K君がナイフをしのばせる。クラスの皆は、K君に対し、「危ない。変じゃないか。」と感じているとのことであった。

性的な発言が不用意に出ることに関しては、行動を変える必要があるし、ナイフについては、使わなくてもいいようになる工夫を考える必要があると、SCは、感じていた。

K君をめぐる担任との話し合いの中で、SCが感じていたことは、K君の性格は、変わりにくいこと。環境調整を通じて、彼の行動を変えることなら出来るかも知れない。従来クラスの人達の対応は、彼を追い詰める。彼を孤立させてはいけない（ナイフを持ち出さずに済むように）。

担任のクラスへの呼びかけである、「孤立感K君を追い詰める。彼を追い詰めてはいけない」という話をクラスの子は聴いていたとの事である。周囲は担任の話を受け止めて、K君に対応しようと努力してきたが、K君がそれを裏切ってきたというも、担任から聞かされる。

N中は、色々な中学を見た上で、母親がK君にとって適当ではないかと選んで、入学を決めたとの事である。

[担任との話し合いで、SCが考えたこととしては、性的なことを、不適切な場面でつぶやくK君に対し、女子の前で不用意に出すのではなく、安心した場で、適切に表現することを学ぶ必要があるということであった。そして、同世代の男子集団の中で、出来ないようであれば、そうした場をSCが用意する必要があるということであった。]

担任との話し合いで確認できたことは、K君は、言ったりしたりしていることが、文脈からずれているらしいということである。担任によれば、クラスの仲間も十分に相手をしている。

K君は、相手に質問攻めをする。コミュニケーションの取り方が一方的。周りが見えない。反応を見据えた上での対応が取りづらいついた特性がある。

他方、K君の資源としては、そろばん、料理、電車、絵を描くが、挙げられる。

● SCが当初考えていた処方

彼の絵を描くことが得意という資質を活かして、彼が性的な世界を適切に扱えることを目指して、解決志向アプローチ（Insoo Kim Berg [1994]）に基づいて、処方考えた。

処方は、まず、父親がポルノグラフィーを買ってきて、K君に渡してもらおう。1週間に一枚、気に入ったものをK君に写生して持ってきてもらおう。それを基に話し合う。

↓

上記処方を母親にTELし、伝える。B市に出張している父親が買って送ってくれることに。母親は、11月21日（金）10:30 来所予定。

K君は、1日1回ずつ写生（射精）する。

[この時期の性的な世界の理解とコントロールは、この世代の若者皆の切実な課題である。

男子の場合、通常は、この性的世界への接近は、仲間集団によるエロ本の回し読みや、猥談を通じて、少々荒っぽく行われる。それらの知識の多くが偏ったものであったとしても、グループの力が上手く働いて、通常は、無茶な行動化は押し止められる。

K君の場合、女子の前で不適切に性的な発言が見られたことから、性的な話は、安全な構造の中で扱うべき事を、学習してもらう必要があった。同時に、同学年の男子の集団に属することが、この時点では難しいと判断されたK君に、父親とSCが、K君が安全に性的世界に触れる場を提供したいとの狙いがあった。そこで十分に性的なことが扱われれば、女子の前で不用意に性的発言がなされることが、コントロールされることを期待している(※ただし、この後、より緊急性の高い問題が生じ、この処方を展開することは無かった。)]

X年11月21日(金) 10:35 - 12:45 (2時間10分)

● K君のお母さんとの面接

K君のお母さん来所。K君の攻撃性をどう扱うかがテーマになった。

母親より、今までのK君をめぐる話し合いの経緯について、説明を求められる[これまでの対応について説明求められるのは当然。こちらに関わりの経緯を説明する義務ある。相手は当事者]。

● SC→母

<まず、話し合いの経緯を答える>

<1) 養護教諭からの依頼で、保健室でK君と初めて、接触した。

↓

2) 養護教諭、担任、SCで話し合い、3者で連携してK君の課題に対応していくことにした。

3) 担任からSCへの情報提供としては、特に性的なことに関するK君の直接的な出し方が、クラスでのトラブルのもとになっている。>

母親にポルノグラフィーの処方を伝えた。

[父—息子の間のやり取りとして、自然と言えない部分があるかも知れないが。]

(※ただし、この後、より緊急性の高い問題が生じ、この処方を展開することはなかった。)

● 母→SC

母:「サイバー・プログラムの案内がKあてに届いた。」

[内容を拝見させてもらう。強くなりたいたいというK君の思いが表われている。]

[攻撃性のテーマは、思春期男子の2つめの課題として、性的な課題に次いで、大事なテーマである。]

<攻撃性のテーマは、思春期にとって必要な課題。これと格闘して大人になる>

<お家で具体的に困ることは?>

「弟(小4)をたたいたり、蹴ったり。腹いせのような感じ」

[攻撃性を適切に表現できる、家庭以外の場が必要である。]

「2歳から小学校5年生まで、療育センターで療育相談を、学習障害（LD）ということで受けていた。健常の範囲となり相談は打ち切りとなった。学習はついていける。

得意なのは、数学。苦手は国語。読解力ない。読まない。文芸・文学作品読まない。情緒や文脈読み取れない。」

[対人関係にも通じる。彼の難しさは、この辺りの認知のあり方と関わりあると思われる。]

[彼の攻撃性を安心して出せる枠組みが必要。例えば、空手、柔道の道場に通うこと。道場は、その枠組みの中では、攻撃性を発揮することは、正当に評価される。道場では、力強くなることと、日常の場面で行動をコントロールすることが、訓練される。道を究めることは、即ち、人になっていくこと。]

「『僕には友達いないんだ。ひとりぼっちなんだ。』とKが訴える。私自身、中学時代5度も転校して友達できにくかった。本人には、『大丈夫。出来るようになるよ』と伝えている。」

<孤独の意味を語る。本当の自分自身になっていくためには、ひとりぼっちになっていくことも必要。>

「以前、ゲームセンターに入り浸りだった。TVゲームを本人の小遣いで購入した。導入については、約束・枠付けを行った。」

<どんなゲームをしているようですか？>

「車の運転と、格闘技。弟と2人でプレイする。」

[正に、コントロール感の獲得と攻撃性という今の本人の課題に答えている。コントロール感も攻撃性もビジュアルには十分に体験している。次には自分の力を使って、安全な枠組みの中で取り組んでみる。やはり、空手、剣道、柔道。例えば、宮本武蔵の様に、荒くれた青年が、道を究めた結果として、統合された剣豪に成長した例が見られる。安全な枠組みの中で、攻撃性を発揮したり、コントロールする体験は、今のK君の課題にかなっている。](※道場に通う話は、SCの胸中では語られるが、言葉としては、母親に向けて発せられていない。母親の必要にかなうものか、SCとしても量りかねている。)

「弟と兄との関係性を分離する存在だった父が2月まで不在」

[家庭の中で、適切な境界を引く役回りの父親の不在は、大きく響くだろう。K君も弟も守られない。]

「12月6日にクラス保護者懇談会に出席する。ナイフの件問われる。他の母親に、Kのことどう説明するか。変わった人間に映る。」

<母親の目から見て、情緒を読み取ったり、対人関係を取り結ぶのが苦手な点を感じている。そうしたこともあってか、クラスの中でも孤立しがちであり、小突かれたりすることもあったようだ。そうした中で、気分的にかなり追い込まれていて、ナイフを持っていき、出したように理解しているが、許されることではなく、本人にも言って聞かせている。お騒がせして申し訳ありませんでした、と答えたらどうでしょう>と提案。

「その線でやってみます」とのこと。

<近いうちに、担任、母、K君、SCとで、取り組み方の方向性について話し合うことが必要になっ

てくると思われます>

[何より、K君に取り組みやすい処方である必要がある。担任にも要連絡。]

「何でも連絡下さい」とのこと。必要に応じて来所して頂くこととし、次回の約束はなし。

◆ここで母親と2時間あまり会っているのは、危機介入(山本、1986)の考え方によっている。タイミングよく介入すること、危機の特性を生かして、十分な成果を上げることが、目指されている。ここでは、K君の家庭での有り様であったり、クラス保護者懇談会で、K君のナイフの件をどう理解してもらえるように、母親が話を出来るかが焦点となった。SCの私見ではあるが、この2時間の話し合いを通じて、母親との信頼関係も深まったと感じている。

X年11月26日(金)9:20-9:30(10分間)

●担任との話し合い。

「先週の金曜日、心配してK君の母親にTELをしました。母、担任、K君、SC、4人で会うことになったとのことだが、どういうことですか?母親からそういう希望が出されたのですか?」

[担任は、疑心暗鬼になっているところがある。必要な情報はSCからきちんと伝える必要がある。そうでないと、母親もK君も守られない。それだけ担任にとっては、K君をめぐるクラスと彼との間の上手くいかなさは、相当に不安の種なのだろう。]

<いえ、私が近々その必要が出てくるだろうと言ったのです。金曜日に先生にもお話しして帰るつもりでいたのですが、お会いできなくて。とにかく、K君自身に是非やりたいと思ってもらえるような工夫をこちらがしなければいけないし、彼の同意なしには出来ないことなので>

「分かりました。本人に話をしてみます。12月5日(金)で考えておきます。」

[担任とは、K君を紹介された当初から、比較的、信頼関係が取れていたものの、担任の性急に問題を解決してしまいたいという焦りをとても感じ、その焦りを支える必要があると思っていた。]

X年12月5日(金)8:40-8:50(10分間)

●次回の面接の準備を担当からしてもらう

担任より、「今日の4限にK君と3者で話し合い」を、との申し入れされる。SCとしては、母親との間で確認していた処方のことが頭にあり、お母さんに立ち会ってもらう必要を感じた。

<お母さんはいらっしゃらないのですか?>と問うと、「いいえ、一緒の方がいいですか?」<はい>とのやり取りあり、TELしてもらう。

K君は、今日は、欠席とのこと。

母親より来週の13:00の面接の予約をもらう。<K君も一緒にいらっしゃいますか?>と問うと、「本人に訊いてみないと分かりません」とのことであった。

●担任からK君の近況を聞く

その後、担任と少し立ち話をし、最近の彼の様子を聞く。

1) 駅裏で女子校生にナイフで脅され、謝罪させられた件。G校生（G校の中高一貫の女子校である）、女子4、5人に脅される。彼はG校の文化祭に行っていた。「この子達のおっぱい触っただろう」と彼にとっては全く身に覚えのないことで、からまれた。からかわれたか？K君が謝って、帰された。

2) クラス担任との面接のためのアンケートで、気になる点がある。友人欄が、空白であることである。

3) クラスでの様子で、気掛かりな点がある。気に掛けている者はいるが、心の底から彼とのやり取りを楽しんでいるわけではない。嫌われている。

X年12月6日（土）は、K君のクラスの保護者懇談会有り、K君の持ち出すナイフについて、母親が説明を求められることになっていたが、K君がG校の生徒に脅される事件の緊急性が高く、懇談会での説明の件は、母親との面接の中で話題にされることは、無かった。

X年12月12日（金）13：20－14：05（45分間）

● K君の母親から、G中での問題について語られる。

母：「Kが脅されている。Kだけが問題にされるのは、どういう訳か。Kの気持ち、Kの受けた被害はどうなるのか。両方のケアがあってしかるべきではないか。学校に行きたくないと言っている。月曜の夕方、家にK宛のTELがあった。男女4人に脅されている。G校女子生徒の靴に手紙入れたと、女子からの電話。G校の文化祭にKは出掛けた。その後、駅裏で女子にナイフ突きつけられ脅された。このこと境に女子よりTEL。いつも夕方4:00頃。電話を受けたKは感情激しくなり、パニックに。私としては、一人で悩むなど言っている。J中の部活（アマチュア無線）の後輩が絡んでいるらしい。文化祭に行った友達が、家のTEL番号知っている。土・日は、弟とゲームをして過した。火曜日には学校を休み、弟に八つ当たり。怪我をさせた。水曜日は2時間目から登校した。1月に無線の試験で長野に出掛けると言っている。木・金と学校に出掛けた。学校嫌いにさせたくない。」

[母親から、K君への脅しに対し、直ちに対応して欲しいと訴えられ、ここで初めて事の重大さにSCは、気付いた。対応としては、環境調整を中心に、コミュニティ・アプローチの必要を感じた。対教師へのコンサルテーション（山本、1986）を中心に据えることにする。母親には、家での対応中心のアプローチ（K君の心理的安定を支えること）を処方し、対応が遅れていることと、新たな処方の導入を図ることで、負担をかけたことをわびた。新たに、他校も絡んだ、K君が脅迫を受けるといった問題が浮上してきた。このことにより、母親を通じ父親にお願いしていた処方の件は、一旦棚上げとする。]

[また、K君とクラスの仲間の関係作りに生かされるように、K君を理解してもらうことが大事

である。母親からは、持参した学習障害(LD)のビデオを「観てもらいたい」と要請される。参考にし、K君の抱える特有の難しさを理解した上で、クラス運営に活かせるような話をしていきたいと考えた。母親からは、「クラスに理解してもらえるギリギリの機会と捉えている。中3になり、受験になると、友達作りや理解は難しい。」と切迫した感じが伝わってくる。SCもここが勝負所と考えている。]

X年12月12日(金)14:20-14:40(20分間)

●教頭と協議。

SCより、脅しをめぐる、K君を取り巻く状況を伝え、学校、学年での対応をお願いする。K君のお母さんと面談後、母親とも協議し了解を得ていたこともあり、教頭と上記の点で打ち合わせ。教頭からは、担任から得た情報と異なる点もあるが、学年で早急に対応するように指示しますとの約束を得る。

教頭は、K君のことを当初から気に掛けてはいたが、担任に任せ、積極的な対応を取ってはいなかった。しかし、他校とのトラブルという事態を迎え、組織的な対応をする必要をこの時点で既に感じ、前向きで、SCにも協力的であった。

X年12月19日(金)11:00-11:10(10分間。TEL相談)

●K君のお母さんより、SCあてにTEL。

ビデオを観たかどうかの確認をされる。担任にも観てほしいとのこと。G中との話し合いで、K君が大人に囲まれ、被害者なのに詰問されないかと心配が語られる。ビデオの件は、後で担任に話し、見てもらうことに。また、G中との話し合いについては、SCの方から、〈経過、聞いておらず、確認することにします〉と伝える。

X年12月19日(金)11:20-11:40(20分間)

●K君の担任より、職員室で相談を受ける。先だつての3者面談でのK君の様子が話題に。

「様子が変わった。自分のことばかり脈略なく話をし、面談にならなかった」とのこと。「母親は一言、学校でのストレスを弟にぶつけて、弟が大変なんですと。お母さんは、私や学校にこうして欲しいというの、あるのかしら？」[担任を引き入れるチャンス!]

〈K君は今でこそ、障害のレベルにはないが、小さい頃、学習障害(LD)の判定を受け、訓練も受けてきた。特有の難しさを持っている。それはそういうものとして、理解して受け容れないと。彼だけが変だ、おかしいと問題にしても、変化していかないし、クラス運営はうまくいかないように思う。お母さんの願いは、ひとつには理解して欲しいということ。それでビデオを。もうひとつは、K君がクラスの仲間とうまくやっっていけること。けど、まずは、理解してもらえること。〉

「ビデオは見てみたい。クラスには障害があるということと言った方がいいのか？」

〈それは難しい。理解できる子とそうでない子がいる。〉

「難しいですね。また、クラスの運営のことなど、相談させて下さい。」

<こちらこそ。>

[担任が自らビデオを観たいと言ってくれたこと、大きい。母親にも連絡。]

X年12月19日(金) 11:45 - 11:53 (TELにて)

●SCよりK君の母親あてにTELする。

G中の話し合いで、詰問されることになるのではという点に関しては、そうした意図はなさそうである。事実関係の確認に行く。特に駅裏で脅された件は、4時間も脅されており、K君も顔の確認ができるとの事で、それをやりに行くこと伝える。

母親より、参考になればと思ってと、脅しのTELの履歴を報告して下さる。

11月17日(月) I、D、Fの名でTEL。Fの名で度々TEL有り。

12月3日(水) TEL。12月1日(月)に女子の下駄箱の中に手紙を入れたとの主張。本人やっていないと応じる。12月1日(月)、K君休んで家にいた。手紙入れること不可能。

12月4日(木) R2回、H、TEL。

12月8日 W(男子)、TEL。

X+1年1月16日(金) 14:00 - 14:10 (約10分間)

●Kくんの母親より、相談室にTEL有り。K君が脅されていた件の経過の報告と環境調整の依頼
13日(火)に無線部1年のW(男子、S小の出身)と名乗るTELある。「K先輩お願いします」(本人の話では、声が違うので別人ではないかとの事)途中で女性に替わった様子。K君の様子が変わるので、母親がTELをとると、女子が泣いていて、「全部私がやりました」という。G中の女子学生と名乗る。やった内容については、手紙に書いた内容と同じとの事。手紙はポストに入っており、切手は貼ってなかった。K君は中身を見せないの、母親としては、中身は分からない。Kには、担任と学年主任の先生に見せなさいと言ってある。

TELしてきた女子中学生には、中学生なのだから、善悪の判断できることを告げ、もう2度としないことを約束させた。女子学生は父子家庭のようで、祖父母に育てられている様子。周りの人に相談して下さいとアドバイスされたとの事だった。

電話の周囲には2、3人仲間がいる様子で、母親が「私は、G中にも行ったのよ」と話をすると、「これ、ばれているぞ」という声が拳がったとの事である。

これ以外にも、

1月8日(木) 14:00には、J中のO(男子)と名乗りTEL。

1月12日(月)にも、A.M.11:40にJ中のH(男子)と名乗りTEL。「折り返しTELします」と告げると、相手が電話番号を教えた。

SCからは、お母さんの見立て通り、J中の生徒との組織ぐるみの嫌がらせでしたねということを確認した後、お母さんと協力して、教頭先生にも入ってもらって学年で組織的な対応をしたこと

が、功を奏したことを確認した。引き続き、K君が学級や学年で気持ち良く過ごせるための組織的対応や環境調整の必要を説き、今回のことを、教頭、学年主任、担任と共有していいかを確認し、了解を得る。母親からは、療育センターのDr.を招いての研究会も提案される。

[今回のことをマイナスのことだけで終わらせたくない。組織的な対応や環境調整がK君にとって必要なのだということを教員集団が学ぶ機会にしてほしい。]

X+1年1月16日(金)14:10-14:30(20分間)

●教頭と協議。

すぐ直前のK君のお母さんとのTELで確認したことを、教頭と共有し、組織的対応や環境調整について依頼をする。教頭としても、K君のケースについては、組織的対応や環境調整の必要を以前より感じていたとの事。彼が環境調整によって上手く受け入れられれば、問題行動はかえって減ると考えているとの答えである。今回のことは、本当に分岐点であり、上手くすると成功ケースへと移行するチャンスと捉えていた。それだけにSCとしても、踏ん張り所である。

この日の朝、担任にビデオを渡す。嬉しそうに受け取る。

X+1年1月23日(金)9:20-9:30(10分間)

●SCより、K君の母親にTEL。先週教頭と話した内容を報告する。

母:「最近、Kが学校に行きたくない、つまらないと言っている。毎日こぼしている。スキー教室も行きたくない、今は行きたくないと言っている。勉強への意欲も失われてきている。以前はなかったことなのに。夜中までテレビゲームを5-6時間し、その後、倦怠感や疲れがドツと出て、ボーッとしている状態が、週に2、3回ある。夜中の1時、2時までゲームをしている。勉強やる気を失い、気持ちが落ち込んでいっている。励ましてほしい。成功例を話してほしい。」

[不登校へ移行するギリギリの段階。学年での組織的対応が必要。]

「前回の事件で、G中の女子生徒と仲良くしているのが、E君(S小出身)の仲間ではないか。S小出身のJ中の生徒を洗い出せば分かるのではないか。Kが持っていった手紙の扱いどうなっているのか?報告して欲しい。」

[学校は、家庭からの問いかけに答える義務を持っているはず。]

X+1年1月23日(金)11:40-12:30(50分間)

●教頭とK君に対する組織的対応について協議。

最近のK君の学校に行きたくないといった様子について報告。教頭からも「あの学校好きなK君が…」という反応。学年での組織的対応について依頼。教頭からは、足並みがそろえばいいが、現実的には難しい点が語られる。療育センターへの出張はOKとの事。その出張での成果を持ってもう一度教頭と協議し、今後のK君への対応については一緒に考えていくことにした。

●同日、K君のお母さんに経過報告をする。

2月20日（金）に療育センターに訪問することに。母親も同行したいとの事、了承する。10：00にM駅北口にて待ち合わせ。

X + 1年2月20日（金）11：00 - 12：20（1時間20分）

●療育センター、Y医師を訪問。学校でK君に対応するための基本的知識を得に行く。同時に、今後の協力体制について協議をする。

Y医師：「診断としては、高機能自閉症、アスペルガー症候群。8歳時の知能テストでIQは107で普通より高いくらい。言語能力も落ちているわけではない。問題は対人関係。相手の考えることが分からない。しかし、これだけ能力高いと、友人を求め、異性関係も求める。対人関係での了解の悪さが障害となり、この部分で本人が一番苦しむ。

これだけ高機能だと、外から目で見ても障害が分からないし、理解してもらえず、悩みも深い。大人の介入できる部分で、具体的に場面の工夫などして対応すること必要（こういう場合にはこうした方がいいよ等）である。ただし、同世代の子どもの中で、同級生に納得してもらうのは難しい。担任の対応にかかっている。伝えたい、話を聴いてほしいという思いは、不器用だけど強い。僕はこれだったら出来るという所で、力を発揮できる場を見つけてやる事が必要である。ホッとできる時間や場が大事。

彼が今提示しているサインをうまく受け止めて、周りで安定する方向へ持っていく必要がある。手を打つのは今。

普通に考える幸福の図式に彼を乗せよう乗せようとするのではなく、また、当たり前出来ることを前提に、彼にもそれが出来るようになることを求めるのではなく、ウィークポイントも含めた彼の個性で生きられる世界を見つけることが大事。対人関係は少なく。」

●YドクターとのK君をめぐる連携のあり様

[今後の対応については、SCが軸となり、学校での彼の適応を考えつつ、必要に応じてYドクターと連絡を取ったり、出向いて相談することとした。

場合によっては、Yドクターに学校に来てもらうことも考えられる。

具体的に学校で、どの様にK君に対応していくかを、Yドクターにフィードバックすることになった。]

X + 1年3月初旬（金）

●教頭と担任に、療育センターで説明を受けたK君の臨床像について解説する。

この時点では既に、SCは、次年度の契約の更新をしないことを告げてある。

担任からは、「普通の幸福の図式に乗らないと言うのは、どういうことでしょうか。」と問いかけられる。＜他の生徒に出来るからといって、同じことを彼に当たり前求めることは出来ないと言うことです。障害の部分も含めたトータルな彼が生きていける場を作らなければ…＞

教頭からは、「障害像を伝えたから責任を果たしましたと言われても困る」と詰め寄られる。SCとしてもこの点は心苦しく、当然、臨床責任を果たしていないと言われても、致し方ないと感じていた。こうした事情はもっともなことでもあるが、契約の性質上これ以上関われないことを告げ、引き続き新しいSCが療育センターと連絡を取りながら対応していく体制を作って頂くことと、K君の臨床像を理解した上で、学校で出来る組織的な対応を考えていただき、それをT療育センターのY医師にフィードバックすることを依頼した。

最後に教頭からは、「SCの導入で、教師は楽になるものと考えていた。それが、現場が雑務でより忙しくなるのは、納得いかない。」とやりきれない怒りをぶつけられる。<いや、潜在的なニーズが掘り起こされただけですよ>と応じておいた。

【結果と考察、そしてその後の課題—発達障害の事例に組織的に関わるということ】

このケースは、ようやくK君への関りのとば口に、舞台を飾るべき役者たちが出そろってきたところまでという印象である。そうした意味では、軸となり、黒子となるべきSCが交代となるのは、このケースに関して、殊の外、心残りであった。

担任・学年・学校全体が、どうK君に関わっていくのかという、K君へのマネジメントを束ねる仕事の中心に、SCが位置することからもそう言える。

他方で、組織的な対応がされる以前の、彼の障害特性が理解されぬままに、彼が説諭され、行動変容を求められることが繰り返された対応から、思いがけず、脅迫事件の被害者に彼がなった事が契機となり、問題解決のために、母親が迅速な対応をしたことと、学年が組織的に対応することで、問題が早期に解決することを、関係者が等しく体験することとなった。母親と教員集団を束ねる教頭を橋渡しする役割を、コンサルテーションという形で、SCは担った。

この経験は、教師集団に、K君に対して、組織的対応をすることや環境調整することの持つ働きの大きさを発見させる契機となったのではないかと思われる。

企むことなく、実際にK君の状況を何とかしたいという必死の取り組みの体験から生まれた学習だけに、ここで得られた、K君に対する組織的対応・環境調整の重要性は、教師集団の中に深く浸透したと思われる。

これから先の課題は、K君が持つ発達上の難しさをどう理解し、共有し、彼が息づけるような場づくりをどう組織的に、環境も調整しながら作っていくかという所である。

療育センターのYドクターも言うように、「彼が今、提示しているサインをうまく受け止めて、周りで安定する方向へ持っていく必要がある。手を打つのは今。」「ウィークポイントも含めた彼の個性で生きられる世界を見つけることが大事。対人関係は少なく。」

彼の障害特性を十分に理解した上で、環境調整を中心とした組織的対応で、彼の学校生活を快適なものに構成する責務が、学校にはある。

SCは、新たにこの中学のSCとなる人への引継ぎの中で、殊の外、注意深く、K君の特性を説

明し、母親との協働、Yドクターとの連携、学校内での組織的対応・環境調整の必要性を訴えている。

(文献)

Insoo Kim Berg (1994) *Family Based Services-A Solution Focused Approach*. Norton. 磯貝希久子監訳 (1997) 家族支援ハンドブック—ソリューション・フォーカスト・アプローチ. 金剛出版.
山本和郎 (1986) コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践. 東京大学出版会.